

# 24時間365日 止めない医療の伴走

平成28年、我がまちに誕生した新久喜総合病院。  
「救急患者を断らない」を基本理念に据え、  
高度な医療と地域に根差した医療を提供する同院の決意を、  
蒲池健一理事長に聞いた。

## 埼玉県の現状を打破すべく 久喜に生まれた総合病院

「現在、埼玉県は日本で一番医師不足にあえいでいます。それはすなわち、必要な医療を地域に提供できない事態を招いてしまうのです」。我がまち久喜市・上早

見にある新久喜総合病院の蒲池健一理事長は、言葉に力を込めて話し始める。

厚生労働省が発表した「平成28年（2016年）医師・歯科医師・薬剤師調査」の結果によれば、埼玉県の医師数は1万2172人。人口10万人当たりに換算すると

のだという。

同時に、日本の高齢化率は上昇の一途を辿り、救急搬送数も年々増加。埼玉県の発表によれば、平成28年の救急搬送人員は29万7000人と過去最高を記録した。他方、救急患者を受け入れる医療機関は減少傾向にある。

このような背景から埼玉県では、いわゆる救急患者のたらい回しが多数発生していた。平成25（2013）年、救急隊が重症患者の受け入れ照会を4回以上行った割合は9・4パーセント。これは全国ワースト2位の記録である。この結果を受け、県では救急医療情報システムを導入。救急隊がリアルタイムで受け入れ可能な医療機関を把握できるようにしたものの、根本的な問題解決には至っていない。

「医療機関は救急患者を受け入れたくないわけではありません。

専門医の数や設備の問題から、受け入れられないのです」  
だからこそ、数多くの医療従事者と最新の設備を揃え、地域医療を支えたい。いつ、いかなる時も患者を断らない病院をモットーに、地域へ安心を届けたい。そんな決意を胸に新久喜総合病院は開設したのだと、蒲池理事長は胸を張る。

## 人員と設備の増強で 数多くの救急搬入に対応

新久喜総合病院は平成28年4月、久喜総合病院から運営を委託されて誕生した。運営を引き継いだ一般社団法人巨樹の会は、全国各地で急性期やリハビリなど多彩な医療を提供。特に救急救命に対する取り組みと思えば強く、同会の主軸となる理念だ。

「久喜総合病院では、救急患者の受け入れが満足にできていない

ようでした。そこで私たちは、まず内視鏡や心臓カテーテル室の拡大など、ハード面の整備を進めました」

救急に運ばれてくる患者の疾患で、特に時間との戦いになるのが心筋梗塞や脳卒中。こうした病気が患者の命を救うのはもちろん、後遺症を少しでも減らすための準備を整えたのだ。同時に、医療従事者の増員も推進。「開院当初520人だった人員ですが、来年度には、900人に迫る予定です」。

ソフト、ハード両面の充実による救急患者の受け入れ増加は、数字にも如実に表れている。久喜総合病院時代の平成27年度は年間3373台、1日平均9・2台だった救急搬入件数が、新久喜総合病院となった平成28年度には年間6620台、1日平均18・1台とほぼ倍増したのだ。それでも、「まだ人員は足りないですね。目標は1000人。早く実現したいと考えています」と蒲池理事長。

同院では医療の質にもこだわりの見える。特に重視しているのは各科を横断した連携のしやすさ。科ごとの風通しが悪く、迅速な対応をできなければ、患者の利益にならないからだ。さらに医師

現在、同院の救急科には9人の医師が勤務。急性心筋梗塞や脳卒中などが担うべき2次レベル以上の救急医療にも対応している

に対応できるジェネラリストの育成を掲げる。「そのうえで、何かに秀でたスペシャリストであってほしい。だから、若い医師にはさまざまな経験を積んでもらっています」。

一般的に過酷だといわれ、担い手が不足しがちな救急科の専門医。自身も専門医である蒲池理事長に、救急医療に対する思いを聞いた。「誤解を恐れずに言えば、救急は面白いです。チーム一丸で取り組む姿勢、広範な技術習得はもちろんですが、一番のやりがいがあるのは患者さんの命のすぐ側にいられた部分です」。救急で運ばれてきた患者が、治療後に歩いて帰る姿を見届けられる。それが何より嬉しいのだと言葉を結んだ。

24時間、365日を通して患者の命と伴走したい。地域が安心して医療を届けたい。新久喜総合病院の挑戦は、この先も続いていく。

文/生形勝喜 写真/鎌野伸 写真提供/新久喜総合病院 デザイン/神尾方子



医療法人社団 埼玉巨樹の会 理事長  
新久喜総合病院副院長  
蒲池健一さん

医師や看護師の不足している埼玉県で人員を確保するのは至難。それでも同院が掲げる理念を目指すため、日々まい進している



急性期医療に対応する多彩な診療科のほか、回復期のリハビリテーション病棟も備える  
新久喜総合病院。住所/久喜市上早見418-1/問い合わせ/0480-26-0033



地域活動の一環として、予防医療も積極的に実施。病院を開放して定期的に医師、看護師、リハビリスタッフによる健康教室を開催しており、地域住民の健康づくりを推進している



平成28年度は1日平均で18.1台の救急搬入を受け入れ、重なるときには救急車が列を作り、現場も目の回る忙しさだが、多くのスタッフが懸命に患者と向き合う

**フリモARアプリをダウンロード**

App Store からダウンロード  
Google Play で手に入れよう

**で「フリモAR」を検索**

\*AppleおよびAppleロゴは米国その他の登録されたApple Inc. の商標です。App Store™はApp Inc. のサービス商標です。  
\*Google Play および Google Play ロゴは Google Inc. の商標です。

- フリモAR®アプリをダウンロードして起動
- マークがついた写真にカメラをかざすとスクリーンがはじまります  
※写真の向きにあわせてカメラをかざしてください
- スクリーンに成功すると動画がスタート!